

庭の中のリズム

——庭における花木の使い方のコツ——

岸村茂雄

一 庭のリズム

今年もまた、何時とはなしに、手稲の山脈が白くなつた。ポプラも葉を落ちつくした石狩の野末に立つて、朝陽に浮きでた新雪の手稲を望めば、思うこと深く、思うこと切なるものがある。

今日の木枯しが、私にささやく——（も）う間もなく、街にも根雪がくる。庭と別れの時が近づいたのだ。）

庭と別れて春四月まで、私は雪の中をどうして暮したらよいであろうか。時が、冷たいペールを取除いてくれるまで、庭と別れての生計を考えねばならぬということ、作庭家にとつてつらい。この時ばかりは、東京の冬の庭を恠に恋う。

……十二月の東京の職人は、忙しい。仕事を終え今年の清算をつけて、妻と正月の準備の買物に出たら、除夜の鐘が鳴り出した暮があつた。師走もせまつて、満月の光で夜半まで敷松葉をしたこともあつた。貧しくとも好きなことで身を立てる喜びが、ほのぼのと心をあたためた夜であつた。松の雪吊りをし、小灌木に稲藁を立て、

寒枯れた苔の上を敷松葉の茶一色でぼかしてゆくと、庭の隅々にまで雪を待つという気持が表われていつて、自分の気持と庭というものがびたりと一致してしまう。そんな時に、庭の奥深くも、ずが鳴いて、十二月の空気がいやが上にも澄みとおつてしまふ。

——私の思いが、東京の冬の庭を駆けめぐつて、石狩の木枯しの中から粉雪が湧いて、やがで、私の全身に降りかかつてきた。積るのかも知れぬ。

こうして、私が北国の冬を嘆いてみても、所詮、それは一つの愚考でしかない。毎年めぐつてくる、春夏秋冬。日も日も、東から出て西に沈む太陽。満ちては引き、引いてはまた満ちる潮。寄せてはかえし、かえしては寄せる波。人間の脈搏、鼓動、そして呼吸も……。すべては、リズムの繰返しではないか。ある詩人は（生まれては悩み、恋をしてやがて死んでゆくばかりだ。）と、いつたが、所詮、人の一生も、生まれては働き、やがて子供を残して消えてゆくことの繰返しではないのか。

自然は、生きとし生けるものすべてに、リズムを強制する。誰でもが、それから通れることはできぬ。どうせ、そのリズムから追越れることができぬなら、リズムを鋭く洞察して、それを幾らかでも快いテンポ（速度）にしなればならぬ。

庭の中におけるテンポの表現とは、私が前にも書いた「真・行・草」（本誌第三卷第八号）であり、庭の配石や飛石の手法の中にあり、七五三といひ、三つ一つ、五つ二つなどという樹の配植法も、すべてリズムの速度のことをいつているのだ。

庭に花木を使うことの意味は、花木は特に四季のあわれをリズムミカルに表現し、季節の景をダイナミックに転換するところにある。そのことを通して、人の世のほかにリズムを知るところにある。

「花のいのちは短かくて……」とは、林美子のよく使つた言葉ではあつたが、花木の使い方のコツというのも、究極はこの花の持つほかにリズムといつたものの、表現の上手か下手かにかかつていると、私は思うのである。

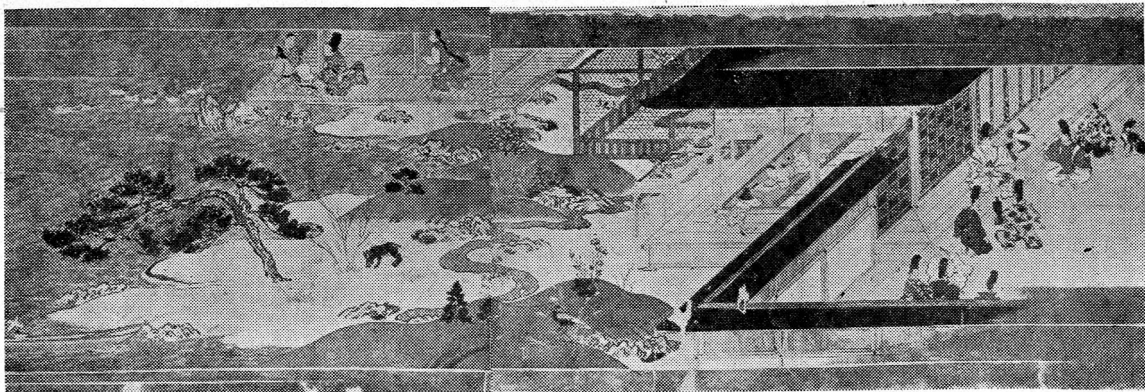
二 花木の使い方のむずかしさ

万葉集に「おしの住むきみがこの島今日みればあしびの花も咲きにけるかも」という歌が見られ、同時代の詩集「懐風藻」には「庭の梅はすでに笑を含み、門の柳は未だ眉を成さず」とあるように、奈良から平

安時代にかけて、すでに立派な庭園があり、池にはおしどり、鶯、緋鯉を飼ひ、桜、梅と共に、山吹、萩、なでしこ、菊、牡丹などの花木が庭に盛んに用いられたらしい。これは、当時の物語や絵巻物からも知ることが出来る。（写真一参照）

作庭記などを通して、当時の庭園を想像してみても、後世の如く常緑樹のみで主要部を造るといふのではなく、その人の好みにより桜梅などが主体となつて用いられ、それに種々の花木が配されたが、それはあくまで自然描写、自然美の再現であつて、せまい住宅の周りに如何にして自然の美しさを表現するかということに、苦心がはらわれていたのは間違いないことである。

それが中世室町時代になると、武家の生活と禅僧のそれとが近接していつて、鎌倉時代以降には、貴族社会の日常生活の中に禅味が完全に溶込んでしまつた。ことに、桃山時代から江戸初期にかけて禅と茶が一味となり、一般人の日常生活の中に禅味がすつかり滲みとおるに至つた。庭園においても、わびとさびが貴ばれ、表現も主観的なものになつて、主観の表現に一番便利な岩石が盛んに用いられ、植物材料としては、その効果を助けるために多く刈込物が用いられた。（写真二参照）勢い、はなやかな花木は表現の邪魔となるので遠ざけられ、この時代の花木としてはウメ・モクセイは多く用いられたが、他はあまりかえりみられなかつたようである。否、かえりみられなかつた、というのではなく、佯び寂びを通り抜けてからの花木の使い方は、目立たぬ



写真一 春日権現頭記絵巻より「俊盛栄達の段」



写真二 大徳寺方丈の庭

が、それ以前よりも一段と高められた使い方となった。幽すいと雅致を破壊しない程度、否、かえってその効果をたかめる使い方となった。この時代から、花木の使い方はむずかしくなったといえる。

ところが近代になると、洋風のスタイルが移入して、芝生や花木と共に西洋草花も大きな位置を示めてきて、庭の一部に花壇を希望する傾向が強くなり、(写真三参照)

庭園の設計は一段とやつかいなものになった。一番困るのは日本庭園の中に西洋草花が希望されることで、草花を用いると如何しても庭が荒れる。庭の渋さといったものが破られる。しかし、家族の中で年輩者は渋い味を好むが、若い人達は草花を喜ぶ。

また、日本人は、心の隅では佗び寂びの茶禅趣味を持ちながら、一方では華やかなものへの憧れを捨てきれない。これは現代人の偽らざる気持であると思う。

これは、どう解決したらよいであろうか。模様花壇式では、どうしても個々の美を捨てて群集として、リズムカルでダイナミックな花を表現しなければならなくなる。そうなる時、一輪の上におののく花の命というものは、消されてしまう。集団として取扱いながらも、茶席で見られるように、掛物もはずされて花一輪だけに宇宙のすべてをこめて生きていくような、あの花を表現できぬも

のか。これを、どう解決したらよいか。

とまれ、私はここに、紙数の許す限りそして思いつくまま、花木の使い方のコツといつたものを記してみよう。

三 どう植えたらよいか

ウメ

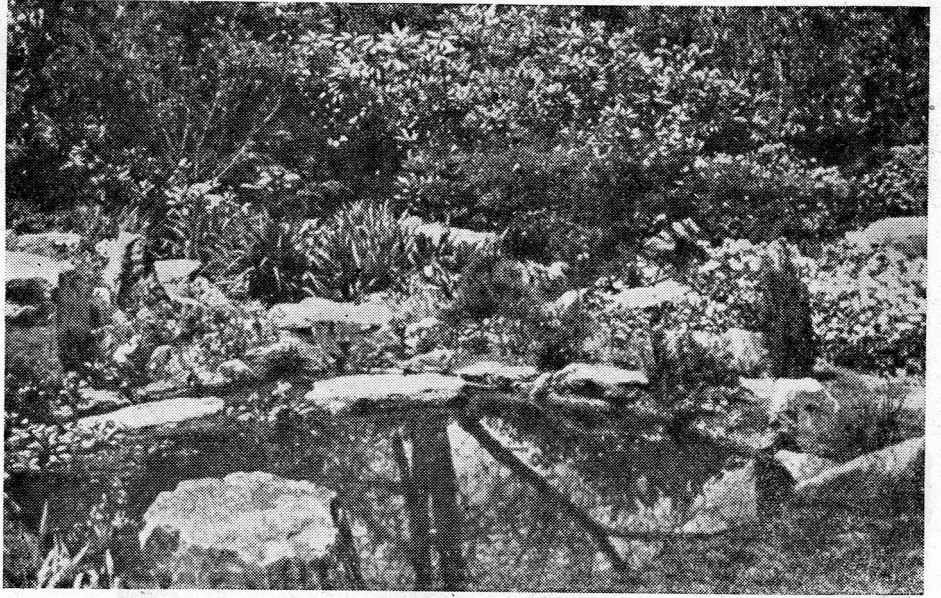
今までの大抵の日本住宅で植えられてきたものに、梅がある。老成したその姿が日本建築によく似合い、群植しては梅林となり東洋の風景によく合う。

単植(一本一、二本植)として庭の中心にも用いてよく、玄関前によく、ぐつと近づけて縁先に用いてよい。書院の窓近くにその香りを漂わせてよく、手水鉢の背景にその雅致ある幹ぶりを覗かせて嬉しい。

しかも、老木でも移植の困難でない点や、春先に立上った枝を捻って枝姿を思うように作ることができるなど、庭木としての好条件がそろって、誰でもが容易に取扱える木だ。

ただ、注意することは、この木には背景(近くとも遠くでもよい)が要る。背景が常緑樹の落着いた植込であれば、枝先の花がほんのり浮びあがるし、バックが竹垣などであれば、かぐろい幹の強いタッチが浮きでる。そのためには、丈の高い立ち上った樹姿をさけて、樹幹の斜に立っているものを選ぶ。つまり、木を低く使って、背景の画面を有効に使うというのがコツだ。

この木を群植することは、広い面積をとることのできぬこれからの時代では少なくなるであろうが、単植とは趣向が大分違つ



写真三 庭の一隅の岩石園

考え込まぬことだ。
サクラ

多くの人が庭に植えたと思う花木に、桜がある。しかし、これは梅のようにはいかぬ。移植も困難だが、枝の切口から腐れが入り易く、したがって樹姿が整わない。花の終わった後の樹冠は、つと、おしい感じだし、毛虫もつき易い。だから、シダレザクラとかの特別の場合以外は、建物から遠く離して使う。

この花の生命は、やはり、遠見として、樹間に点綴するところ、そのためにはヤマザクラがいい。この花が点綴しはじめると、附近の松などが一段と輝き出す。——その効果を

ねらうのがコツだ。

狭い庭に用いる場合には、考慮を必要とする。

モミジ

秋の紅葉を眺めるものを花木とは呼べぬが、庭園においては、やはり花木としての

気持で扱いたい。紅・赤・黄・紫とその色も複雑で、同一株でも生育する場所・年によつて色彩の度合が違ふことがよくある。紅葉するものの中で、カエデ類ほど日本人の趣味に合い、また、使い易い庭園木も少ない。

曲線的な感じに幹が斜に走っている幹も、のは、単植として縁先近くに陽除けを兼ねて用いてよく、その曲線美が数寄屋建築によくあつて、建物と庭とを結びつける効果がある。小住宅では、門冠りとして松の代用にも使われる。

直線的な感じのものは、数本の寄植として、武者立ちもの（幹立ちもの）同様、洋風建築の角をおさえるのに、庭の中のテラス等の緑蔭樹に、落葉樹類の植込の中などにあしらつてよい。

しかし、なんといつてもこの木の生命は、ナラ・ソロ・ゴズイ・エゴ・白樺等の雑木の中に混つて秋の錦をかざる点、針葉樹の中に配して、紅葉によつてそれらの緑を浮き出させる点にある。

群植として紅葉山を作る場合は、梅林の時とは違い、植込の単位を要素所（主に觀賞地点）に作つておき、その間をばらばら植えて結びつけるとよい。ある所はびつじりと寄植し、ある所は間隔を置いて植えるのである。自然の広い雑木林をよく観察して、その感じを会得してほしい。

また、大小取りまぜて、大樹から種子がこぼれて実生がその下に生えてきた、という感じを出してゆく方法もある。しかし、余程広大な庭園でないと、群植は望めない。

それから、注意することは（長所でもあつたが）この木は野趣があるということ、だから、使い場所を誤ると木が非常にあばれた感じに見えるのである。古美術品を見るような上品にまとめた小規模の池にかぶせたり、格式の重い軒先に植込む場合などには、やはり品格があつて幹や枝ぶりの面白いサルスベリなどを用いた方が無難である。なお、夏の盛りに咲くサルスベリは、白花より赤色の方がより季節の感じが出るようである。

そのほか、紅葉する庭園木に、ナナカマド・ハゼ・ヌルデ・コマユミ・ツリバナ・ニシキギ・ドオグンツツシ・ヤマザクラ・コナラ・カキ等があり、黄葉するものに、イチヨウ・ザクロ・シラカバ・ポプラ・カラムツ等がある。

なお、ハウチハカエデ（一名メイゲツカエデ）は、東京附近では黄変だが、山地や北海道地方では紅葉する。

庭のどこに植えても大低うまくまとまるというカエデ類に、一言でいい尽せるコツを私は知らぬが、幹、枝、根張り、特別の見どころのあるもの以外は、少し離して眺めるのが無難である。

シヤラ、エゴ、ソロ

七月になると陽春にはあれほどかわるがわる目を楽しませてくれた花木も、もう葉ばかりになつて、庭はすつかり鬱々とおしくなつてしまう。そんな時、雑木の中を歩いて、苔の上に純白の一輪の花が落ちているのを見つけたりする。（あ、ナツツバキ）と、思わず見上げると、葉の間にかくれる

てくる。幹を同じような角度で林立させぬこと。中には全く倒して、いわゆる、臥龍の梅を作るような気持もあつてほしい。梅林となると梅は陽気なものに変わるから、朝酒でも飲んだ楽しい気持で、即興的に植込んでいつたらいい。個々の姿については、

ようにして、はろばると椿に似た白い花が咲いているものだ。瞬間に身内がすうつと涼しくなつてゆく、あの気持はいい。それがシヤラだ。

あれは、少年の日だつた。憂いの日々を送つていたある時、ふと、茶席を訪れると、床の花入れに花一輪に夜をこめてシヤラが挿してあつて、なぜかしらハツとなつた。あの時の気持を今も忘れずにいる。美しい花であるのに地味な花。見つめていると心があたたまつてくる花。それがシヤラの花ではある。

シヤラは、幹肌がサルスベリに似て美しいが、樹冠が比較的狭く幹は通直で箒状であるので、五、六本の株立ちものならともかくとして、一般には幹を見るために建物の近くに使うというわけにもいかぬのではないか。やはりこの木は、雑木林の中に、二本混ぜて、地味な良さを發揮するように使うべきであると思う。

余談ではあるが、映画「沙羅の花の咲く峠」の宣伝文の中にも「沙羅（一名夏椿）は、沙羅雙樹ともいい、釈迦がこの樹の下で悟を開いたという日本でも珍らしい木で」とあつたが、沙羅雙樹は印度地方の林木でわが国のシヤラとは全くの別物である。シヤラが、最近某地方で一万数千円で植木屋から売られたのを見たことがあるので、老婆心ながら附け加えておく。これは極く安価な木であるのだから。

エゴ、ソロもやはり同じように取扱つてよく、暗い池の面にエゴの花がほろほろ落ちるのもよい。

タイサンボク、モクレン、コブシ

同じもくれん科のこれらの木の中で、モクレン、ハクレン、コブシは、花の形、幹や枝の形と肌が面白く、軒先近くに用いてもよいが、タイサンボクとなるとあくまで庭の奥深くに一本植として用いるもので、この大木を真木として取扱つたために、庭を壊した例を見うけることがある。一葉一葉の輪廓がくつきりと青空に浮かぶ豪放さ、大輪の白花は芳香庭を圧するという感じであるから、建物の近くや中心に用いたくならぬであろうが、これは注意すべきことであると思う。

コブシの類も、軒先近くよりも少し離して単植で用いた方がよいのではないか。背景を緑として花を浮き出させ、その影を池の水に映させたりするのは、誰でもが使いそうな手段ではあるが。

四 花の咲かせ方

施肥

花木は、肥料を多く要するのであるが、庭の木に施肥を考える人は少ない。植木職人も手入は注意するが、施肥までは気を配つてくれない。開花は、植物が次の世代を残す重大な営みだから、大きな勢力を費しているに違いない。

その回復のため、花後直ちに次の発芽をうながす目的で一回（四月頃）その後は花芽を着けるために二回ほど（七月土用前）施肥する。温室咲きの花木の鉢植を買つても、花後は庭の隅に放置し、晩秋に部屋に入れ大切に人が多いが、これでは咲か

ない。冬の世話より夏までに花芽をあけることが大切で、初秋までには体内の栄養により、その芽が花になるか葉になるかが決つてしまう。一旦、葉芽となつたものは花芽とはならない。

肥料の三要素が、窒素・磷酸・加里とは誰もが知つていることで、一口にいえば、窒素は葉、磷酸は花や実、加里は茎を育ててくれる。だから、磷酸肥料を比較的多く施すことで、窒素のみ多いと枝葉が繁茂して花着が悪い。

また、十分な日光と、適当な水分の供給が大切で、水分過剰だと葉のみ茂り花が着かない。

ウメ、サクラ、サルスベリ、ハクレン、ボタン、カイドウ、サザンカ等は特に肥料を必要とする。ただ、モクセイは庭園には若木を植込むから、施肥すると旺盛になりすぎて花を着けない場合が多い。

剪枝、剪根

土用頃にも花芽があがつてきているから、この時期にはもう手遅れで、花木の整枝は春にすませたい。剪根（断根）は、フシ・ザクロ等の樹勢が旺盛すぎて花着きの悪いものに行う。また、ハナミズキ・モクセイは植替えると花着がよい。

五 花の暦

一月

ラウバイ・冬至梅・ツバキ大神楽・山ツバキ・サザンカ・ナンテンの実・サネカズ

二月

ラの実が庭をかざる。

三月

ウメ・ワウバイ・マンサク・福寿草
ツバキ類・トサミズキ・ヒユウガミズキ

四月

五月

乙女椿・クリシマ・エニシダ・アオキ(実)
アンズ・庭桜・吉野桜・赤ヤシホツツジ・ベニウツギ・カイドウ・コデマリ・サンザシ・アセビ・山吹・ハナスワウ・ナシ・スモモ・シャリンバイ・紅山桜・ライラック・ノムラ(芽)・藤・カバレンゲ・アケビ

六月

ツツジ・ドウダン・バラ・牡丹・シヤガ・ユツカ・シヤクナゲ・モクレン・泰山木・クチナシ・コデマリ・ウツギ・ホホノキ

七月

サツキ・桐・ハクチョウゲ・アジサイ・ザクロ・グミ(実)・ネムノキ・カラタチ・睡蓮・ショウブ・シヤクヤク・ザクロ

八月

シヤラ・ムクゲ・キョウチクトウ・サンゴ樹・シモツケ

九月

サルスベリ・ノーセンカズラ
フヨウ・ハギ・モクセイ・ザクロ(実)

十月

サザンカ・ツバキ・ヤツデ・ユズ(実)・ウメモドキ・柿(実)・アケビ(実)

十一月

チャ・ヒヒラギ・ナンテン(実)

サザンカ・ピロ・千両(実)・万両(実)

庭における花木の使い方のコツなどという、生意気なサブ・タイトルをつけてしまったけれど、私はまたなにも書いていない気がしきりにする、つまり、それは庭についてなにも知っていないということなのだ。少くも作庭したからといって、コツなどというものが簡単に会得できるものでなからう。正直にいつて、私は庭が作りた。造らせてほしい。そして、コツというものを発見したいのだ。コツとは悟りだ。悟る時に、庭に対して生甲斐を感じずる。

だから、私には、やつぱり仕事のできる春が待たれる。実際の仕事を通して、一つずつ悟りをひらいてゆきたい。(一九五五・暮)

お庭についての御相談

お庭についての、設計その他御相談がありますなら御一報下さい。誌上又は直接に御回答申し上げます。設計図を必要とされる場合は、建物及び敷地の実測図を(配置略図でも結構ですが、方位や間取り及び御希望を記入して)お送り下さい。建物の姿図(スケッチ)も添えて頂ければ幸甚です。

平面図・見取図(鳥瞰図)を青写真でお送りします。この場合には実費を申受けますが、僅少な額ですから御利用下さい。

一代雑種について

一代雑種(初代雑種)の優秀なることは早くより一般農家、園芸家に認められて来たところであるが、その優秀なることは、初代限りであつて孫の代に至れば却つて劣等のものに化して了うものである。

近年玉蜀黍をはじめ各種蔬菜類にこの一代雑種が多く利用されておるが、その種子を利用してさらによいものを作らうと試みて失敗された農家の方々の声を耳にするので、念のために玉蜀黍に例をとつて述べて見ませう。

玉蜀黍の品種改良は雑種強勢にあるといわれているが、雑種強勢と一代雑種について簡単に説明しましょう。

作物で異なつた二つの品種あるいは系統の間に交雑(かけあわせ)を行つて、その種子を播いて出来た雑種第一代植物は両親の何れよりもいちぢるしく旺盛な発育をすることがあるが、こういう現象を「雑種強勢」といふのである。しかしこの雑種強勢は一般に雑種第一代植物のみに強く現われて、雑種第二代以後では急激に勢力が減退するものである。

玉蜀黍はこの雑種強勢を現わし易いので、品種改良上にこの性質を利用してゐる。玉蜀黍では雌雄の花器が別々になつており、すなわち雄花は茎の先端につき、雌花は茎の中央部の葉脈についている。従つて

この雌花が授精して結実するのは、普通附近の他の株の雄花からとんで来た花粉によるもので、すなわち他花授粉を原則とするものである。従つて稲や麦や豆類などのような自花授粉を行う作物とは全く趣を異にしていて、一般に栽培している玉蜀黍の品種はこれら自家授粉作物の品種に比べて遺伝的にはきわめて不純なものである。

しかしながら玉蜀黍では、人為的に自花授精(同一株の雄花の花粉をとつて、下方の雌花にかけてやる)を行わせることも出来て、これを数代続けるともとの植物に比べて強勢度は低下する(即ち草丈は低くなり穀穂は小さくなる)が遺伝的にはきわめて純粋なものが得られる。こうして出来たものを「自殖系統」と呼んでゐる。この自殖系統は普通の品種に較べて貧弱なもので、そのままでは一般の栽培に適さないが、異つた自殖系統をかけあわせて雑種々々をつくり、この種子を播くとそこにできた植物は雑種強勢を発現して両親に優るばかりでなく、在来の品種よりもさらに増収性のものができる場合がある。このような組合せを利用したものがすなわち玉蜀黍の一代雑種である。

この場合組合せる自殖系統の数によつて種々の名称があり、二つの自殖系統をかけ合せたものを単交配、単交配雑種にさらに

自殖系統をかけ合せたものを三系交配、また二つの単交配雑種をかけ合せたものを複交配と称する。

いま自殖系統をそれぞれA、B、C、Dで示せばつぎのような関係になる。

A × B、C × D……………単交配
 (A × B) × C……………三系交配
 (A × B) × (C × D)……………複交配

しかしながらこれらのうち一般にもつとも多く利用されるのは複交配雑種である。

そしてこれらの自殖系統をつくりだすことや、組合せかたをきめるのは試験研究機関(官民を問はず)が長年の試験の結果決定されるのであるが、優良組合せにきまつたものは種々の採種過程、すなわち原々種(各々の自殖系統の増殖)、原種(単交配雑種の採種)、種子採取(複交配雑種の採種)の段階を経て出来あがつた複交配雑種の種子が一般に普及販売されるのである。

この一代雑種のよい点は雑種強勢で収量がいちぢるしく増加するだけでなく、穀穂がよくそろいその着生位置もそろい、また早害や風害に強いものである。

ただ一代雑種を栽培するにあつて注意すべき点は、前述の如く二代目以後は種々の性質が分離して強勢が劣るので、栽培した一代雑種から採種して翌年採種することは不利益なので、毎年一代雑種の種子を購入しなければならぬ。また一代雑種は雑種強勢によつて旺盛な生育するので肥培管理にはとくに意を用いる必要がある。

(編集部)